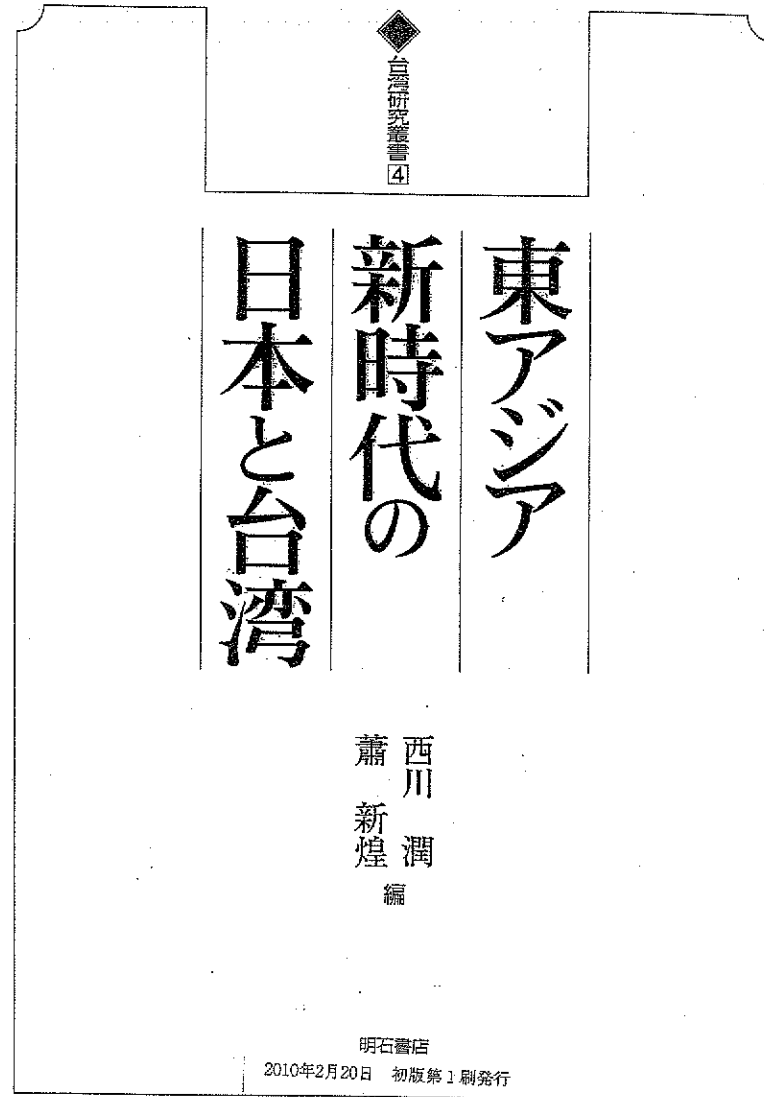


黄智慧 2010 「ポストコロニアル台湾における重層構造——日本と中華」、  
西川潤・蕭新煌編『東アジア新時代の日本と台湾』 pp.159-193、  
東京：明石書店。



第六章 ポストコロニアル台湾における重層構造——日本と中華

黄 智慧

はじめに

日本による台湾統治が終結した一九四五年以降、実質的に台湾はポスト日本植民地期の時代に入った。理論的には、被植民者は植民支配の政治体制から抜け出た後、植民地期間中に抑圧されていた主体性を復活する過程が始まる。知識人たちは植民地期の史料を整理し、被植民者の視点からあらためて歴史の発言権を取り戻し、植民地化された傷跡を克服する営為が繰り返される。このようないわゆる「脱植民地化」の手続きは、第二次世界大戦後、おおむね欧米列強から独立した植民地がかならず経る歴史的過程であり、それによって、被植民者自身を主体とするアイデンティティーの確立と歴史的構築が次第に展開されていくのである。

しかし、日治終結後、六〇余年を経た現在から見ると、台湾という土地で起こった歴史の過程がそうではなかったことは、周知の通りである。日本の敗戦後のごく短い間に、台湾でもいわゆる「脱植民地化」の試みが行われたが、それは優曇華の花のように現れ、そして消えた。日本統治を経験した台湾の被植民者は、ようやく八〇年代末や九〇年代に入ってから、日本の植民期についての主体的な論述を雨後の筍のごとく、さまざまな場面で大量に生み始めたのであった。なぜそのような現象が生じたのか。また、日本について再開した語りが「脱植民地化」と同じようなものであったのか。それを追う形で学術研究がどのようにして台

湾のポストコロニアルの状況と現象を説明でき得るのか。本章ではこうした一連の問題を中心に文化人類学による考察を加え、台湾におけるポストコロニアル期の重層的構造について論を展開していきたい。

## 一 足場の確認

まず、被植民者による日本についての語りを追ってきた筆者の研究経験を通じて、このような研究が直面する問題点を示してみたい。筆者はちょうど八〇年代末期に日本で文化人類学の博士課程に在籍しており、自然な成り行きで文化人類学のフィールドワークを始めることになった。当時の筆者の研究対象は天理教の台湾布教とその受け入れ、および台湾における日本観または対日観であった。筆者は留学先で習得した日本語能力と文化人類学という二つの道具を手に持ち、フィールドワークに臨んだ。しかし、筆者が出会った困難は想像をはるかに超えていた。

まずは研究テーマの位置づけについてである。文化人類学では一般的に研究対象を自文化研究と異文化研究に区別する。研究対象との距離関係から二者の研究アプローチや問題意識はおのずと異なってくる。日本文化は植民地支配を通して一〇〇年ほど前から台湾社会に息づいており、自文化研究の範囲内に入るはずである。だが、こうした日本文化には世代間の言葉と文化の壁が存在し、戦後生まれの世代にとっては異文化としかいいようがない。

次に出くわした問題は、植民地主義の歴史研究の不在である。日本植民地期に続き、戦後には国民党政権の下で長い戒厳令の時代が続いた。八〇年代末までは、思想、言論の自由の厳しい抑圧が存在し、そのため基礎作業にあたる日本植民地期の台湾に関する歴史学研究の蓄積は少なく、現代史研究もほとんどなされていない<sup>＊</sup>。嘆かわしいのは人類学だけではなく、社会科学全体がこの深刻な問題に直面していたことである。

そして、台湾での対日観に関する材料についての問題もあった。かつては国民党政権の下で、権力の言説しか見られなかったものだが、戒厳令が解かれたとたん、これまで声を上げることのできなかった被植民者やその後裔の台湾人によるさまざまな語りが出現し始めた。この怒濤のような大きな流れは、ほとんどが国民党政権への批判を含みながら日本のことを語っていた。また、その語りの範囲が広く、いつまで続き、どこへ向かうのか、当時はおそらく誰にもわからなかった。

このような状況において、筆者は歴史研究の成果を待たず、とくに先住民関係の植民地期文献の整理作業<sup>＊</sup>に没頭した。その一方で、欧米の植民地経験を中心に成果を上げたカルチュラル・スタディーズの理論を参考にしながら、台湾の事例が既成の学問的蓄積からは論じきれない部分が多々あることにも気がついた。また、当初、伝統的な無文字民族を対象とし、集落を単位として一カ所で長期にわたる伝統的な人類学のフィールドワークを行おうとしたのだが、この手法を台湾のような多民族から構成される被植民者社会に適用するのは難しかった。そのため筆者は集中的に聞き取りを行ったほか、回想録や口述記録、日記、証言集、評論、創作作品など、被植民者本人が書いたものを中心になるべく多くの事例を探し求めた。このように学際的な手法を取り入れることによって、初めて広範囲にわたるポストコロニアル現象を分析することができると考えたのである。

九〇年代後半から、①高砂義勇隊のポストコロニアル状況の解説、②二・二八事件前後の対日観の変化、③日本語詩歌サークルの文芸活動と作品における「悲情」の解説、④「日本文化論」に見られる対日観、⑤「戦後」処理における慰霊の課題、に加え、初期に行った⑥台湾における日本宗教、の六つの側面について<sup>＊</sup>の研究を積み重ねることにより、台湾のポストコロニアル現象の感触を掴むことができた。

これにより、筆者が得た結論は、過去二〇年間（一九八七～二〇〇七年）、戒厳令解除後の台湾は二層の植民地主義後のポストコロニアル状況におかれているということである。この一〇〇年あまり、多民族から構

成される台湾社会を覆っていた一つの植民地主義とは、後述する日本植民地主義（一八九五―一九四五年）と中華植民地主義（一九四五―八七年）である。したがって中華植民地主義の崩壊後、このような内部構造を備えた台湾のポストコロニアルの風景は、多民族間の力学関係の変動により、単一植民地主義のポストコロニアル社会に比べてはるかに複雑である。台湾の被植民者の対日観をはじめとするさまざまな社会現象は、このような二重構造の脈絡から分析することによって、新たに理解することが可能となるのである。

以下、他分野の研究成果と対話しながら、台湾の内部構造における錯綜した複雑な関係を説明を加えることとする。

## 二 被植民者の歴史観

筆者が、台湾のポストコロニアル状況は二層の植民地主義によるものだと見なすべきである、ということに最初に気づいたのは、一九九八年に学会で高砂義勇隊の口述記録の分析を行っていたときであった。当時、第一層目にあたる日本統治を植民地主義と見なすことについては異議がなかったが、台湾の学术界で国民党政権を植民地主義とする研究者はまったくなく、ましてや国民党が二〇〇〇年に政権を失うなどと予測する人もいなかった。筆者がこのような結論を得たのは、高砂義勇隊がたえず強調する「日本精神」、および日本統治時代は蒋介石政権よりもよかつたとかれらが思っていること、いまだに日本人アイデンティティを持つていること、などを読み取ったからであった。このような表現はひじょうにはつきりしており、かつストレートで、どのような立場の聞き手から尋ねても、得られる回答は同じであった。そして、マイノリティである原住民族にとって、戦後台湾に來た国民党政権はたしかに異民族による支配であり、二度目の植民地支配という概念によつてのみ、これを適切な解釈することが可能だったのである。

しかし、高砂義勇隊に続き、二・二八事件の口述記録の研究と日本語詩歌サークルの作品分析を行った際、驚くべきことにマジョリテイの人々の側にも同じような表現が見られたのであった。つまり、かれらは日本の植民地政権と国民党政権をたえず比較し、しかも、後者のほうが劣るという同じような結論にいたるのである。このような叙述はつい最近整理された史料からもうかがわれる。

私が一九四六年五月帰った台湾は、私が今迄住んできた台湾とはすっかり変わっていた。陳儀が絶対権力で台湾を植民地として統治していることは日本人が統治していたのと変わりがなく、その権力はより野蛮、無智、暗黒、不正であり、台湾人大衆はいつもこのような統治に不満を持ちつつ生活していた。街頭で、また街屋で、民衆はお互いに阿山「外省人の呼称」の悪口をいい合っていた。私は、自分の運命を苦しんだばかりでなく、過去一生懸命祖国の夢を追ったことを初めて反省した。私と同じ年代の人、或るいは其れ以前の台湾人は、林猷堂にしても、蔣渭水にしても、殆どが日本人が不平等に台湾を統治した不満から祖国への思慕をつのらせたのだが、かれらは祖国の人民がどんな生活をしてきたかを研究し、思考することはなかった。数千年来、中国民族は、一君万民の動乱のなかに苦しい生活をしてきた。台湾人は、こんな苦しい生活から逃げる為に、祖国を棄てて台湾へ移民したのである。今日、日本帝国主義は敗戦して、台湾は祖国へ帰ったが、祖国は決して暖かい心で、台湾人を遇しなかった。このままでは、すまないと思つた。

この史料は楊基振が四〇年にわたつて日本語でつけた日記で、國史館により整理・出版された。楊氏自身は二・二八事件に参加しておらず、その直接の被害者でもなく、悩みながらも国民党政府の技術官僚を退職するまで続けた。日本統治時代に祖国に対して大きな期待を抱いていた彼も、二・二八事件およびその後の長期にわたる戒嚴令の統治下にあつて、過去一生懸命祖国の夢を追つたことを初めて反省したのである。こ

のような二・二八事件後に起きた心のうちの変化に関する叙述は、戒嚴令解除後に出版された多くの回顧録の随所に大量に見られる。

そのほか、日本語の表現能力に優れた日本語歌人たちも、同じような心のうちの変化を経験している。かれらはポストコロニアル期に、優れた文学的表現力で被植民者自身の歴史観を表現した。たとえば長年台湾川柳协会会长を務めた李琢玉は、次のような川柳を残している。

破りたい部分が多い台湾史

鮮血と涙で綴る台湾史

シナ人に歪められてた台湾史

裏切りと使いつ切りの台湾史

敗戦の責め背負わされた盧政史

半分は水増し中華民国史<sup>＊</sup>

このほか、短歌のなかにも同じような表現が見られる<sup>＊</sup>。

一世紀口を縫はれし台湾人日本と蔣氏の軍事独裁に（潘達仁、一九九二年）

世代ごと国語の違ふわが家庭歴史のままに断絶に慣る（顔梅、一九九五年）

このような作品から見出せるのは、歴史は自分たちのものではないから破り捨ててしまいたい、そして前半の日本にしろ後半の蔣氏軍事独裁政権下にしろ、一世紀にわたって、口を封じられ、たとえ口を開いても、

世代による使用言語の違いのため、もつとも身近な家庭の歴史すら伝えていくことができない、ということである。また、歴史は台湾に來た中国人により曲げられ、自分たちは戦争の発動者でもないのに、敗戦の責任を負わされているということである。そして、かれらは「裏切り」という言葉で中華民国に対する感覚を表し、「使いつ切り」という言葉でポストコロニアル期の日本に対する感覚を表現している。これらは前後の時代を一つの天秤にかけた被植民者の歴史観の表現といっていだらう。

台湾のポストコロニアル現象を分析する際に、とりわけ扱いにくかったのは歴史の問題である。それは前述した歴史学研究の空白のほか、被植民者が自分自身の歴史について、植民主の圧迫で語れなかったことにも起因する。圧迫が解かれて、今度は語ろうとしても、言語環境の変化から、一番身近な家族にも聞いてもらえない。このような事情から、被植民者の語りは庶民の隠喩として現れがちで、時には晦渋な表現となり理解するのに解読作業が必要になってくる。

後から來た中華民国が「日本人が統治していたのと変わりがない」という見方は、原住民族だけではなく多数者民族にも見られる。民衆は、植民地主義云々という定義づけはしないし、またする必要もない。筆者はこれを「民衆の比較政治学」的現象と呼んでいる<sup>＊</sup>。ただし、このような被植民者の民衆側の歴史観は歴史研究の学界において、はたして反映されているかどうか。つまり、被研究者であるネイティブあるいはサバルタンの認識のカテゴリーと研究者の分析カテゴリーが一致するかどうか、学問的な問題となってくる。

台湾史研究におけるはじめの一冊は、先史時代から二〇世紀後半にわたる通史——史明の『台湾人四百年史』である。この本が完成した一九六二年に、史明は台湾統治を行っている蔣父子をトップとする国民党体制は独裁専制の植民地統治であると主張していたのである。

当時は蔣介石が台湾に來て一四年しかたっていないが、史明は政治・経済関連のさまざまな資料を分析することにより、台湾人が中国人に支配され搾取される一種の植民地状態におかれている、と考えた。

この一四年間にかれらは台湾において、

一、立法、司法、行政、考試、監察の五院制をとる中央政府

二、六〇万人の陸海空の軍隊

三、中国各省政府の弁事処およびその人員

四、二〇〇余万人の亡命者および避難民

を台湾・台湾人に養ってもらってきたのである。

……すなわち、中国人と台湾人の関係は、「支配者・搾取者」と「被支配者・被搾取者」という截然たる断層をつくり、典型的な植民地二重構造を現出してきたわけである\*。

後日、増補版執筆の際、蒋介石政権が台湾に亡命して二五年後に、史明が目にした台湾は依然として次のようだった。

(一) 台湾人と中国人の間における被支配と支配の差別を厳然と維持する。

(二) 台湾の政治・経済・文化・社会の各般にわたって、その最上層かつ最中枢を占拠し、植民地体制を堅持する。

(三) 敗残の六〇万軍隊（近時、五〇万に改編）を植民地統治の後楯とし、かつまた内外と取引する政治資本とする。

(四) 「中華民国政府」と「大陸反攻」の虚構を維持する。

という四項を主たる内容とした「台湾統治基本策」を確立した。

……それが基本となり、かれらが台湾に一步を印するや、たちまち、

(一) 植民地統治の外郭機関（下級機関）—— 中華民国政府

(二) 植民地統治の中核機関（上級機関）—— 中国国民党

(三) 植民地統治の権力中枢（真の統治主体）—— 蔣父子を長とする特務組織

というような、世にも稀なる「三重統治」の体制を造り上げた\*。

史明は「被植民者としての台湾人の立場」から台湾史を書いたといっている。日本で集められるかぎりの史料と、当時の台湾の政治経済、および社会情勢の統計資料、さらに五〇〜六〇年代のもっとも批判力のある左派理論を駆使したこの著書は、学界の研究と比べても引けをとらない。しかし、彼は学界に属さず、彼の通史の影響力は限られていた。それは、台湾独立主義者の「特定の政治的立場」を強く反映した通史と見られ、学界からは敬遠されていた。

同じ時期に出版された台湾通史の著作、王育徳の「台湾——苦悶するその歴史」（一九六四年初版）も同様に、台湾独立派という特定の政治的立場に立つ書籍だとされる。王は台湾が植民地主義の下にあるかどうかという議論はしていないが、台湾の四〇〇年の歴史においてオランダ、明代の鄭氏、清、日本、そして中華民國という「よそ者の支配者」に台湾は五度支配されたという。彼は、よそ者はいつか離れていき、残ろうとしたものだけが台湾の主人公になれる、と考えた。当時、彼は被植民者としての台湾人が支配者を比較する行為についても感じるところがあった。それから三〇年たった今日でもいまだに同じような現象が見られるのは、先にも述べた通りである。

一千万の台湾人の大多数は、この二つの時代にまたがって生きてきたのであり、かれらが何かにつけて、二つの時代を比較することは、転居したときに、以前の家と現在の家を比較するように、人情の常

であつて、ここでもし、日本時代の方がまだマシだったという結論でも出ようものなら、事態は重大といわねばならない。「もとの形に戻ったのだから」とか、「同じ民族でないのか」とか、「自由中国の看板の下で、植民地支配云々とは」とか、物事を表面的、また、単純にしか見ないひとの頭では、上述のごとき比較論は、そもそもなり立たないと考えるに違いないし、いわんや、日本時代に軍配がある可能性も有り得るとは、とても信じられないであろう。台湾人にしてからが、日本時代と国府時代を同じ次元から比較する身になるうとは、ツユ思わなかつたのである。<sup>\*14</sup>

今日の時点でこの二冊を振り返ってみると、反政府運動のリーダーであつた史明と王育徳は二人とも、一九六〇年代初めに日本で日本語の書籍を出版しており、これが台湾の内部に伝わることはなかつた。史明の「漢文版」は一九八〇年にアメリカで出版され、台湾の書籍市場では一九九八年になってようやく出版されている。王育徳の本の中国語版は一九九三年になってから台湾で出版された。よつて台湾島内の世論がこの二冊の影響を受ける可能性は低かつた。それにもかかわらず二十数年後に、次々に出版された台湾の被植民者の語りに、二人と同じ視点が見られることになつた。ということは、当時史明と王育徳の書いた歴史書は、理論的な価値はどうであれ、同じ歴史的经验をしてきた被植民者の視点を反映しているということができよう。しかし、かれらは活動家として、国民党との抗争の真最中にもあり、命の危険に晒されつづもこの二冊の執筆にあたる。一方、台湾ではもちろん、日本の歴史学界でもこの闘争に巻き込まれることを恐れ、史明などが提起した主張について議論が継続することはなかつたと思われる。

しかし、史明と同じく一九一〇年代生まれの世代で、台湾育ちの歴史学者向山寛夫は、八〇歳になつてから史明と同じような見方を述べた。

台湾の場合、……国禁を犯して中国大陸の華南ことに福建、広東両省から渡来した流民が住み着き、しかもオランダ、鄭政権、滿州族の清国に支配され、その後の日本の植民地、第二次世界大戦後も實質的に中華民國の植民地であつた。<sup>\*15</sup>

向山寛夫は戦後史を専門とする研究者ではないが、台湾における日本の植民地史に長けており、しかも彼自身、戦前と戦後の二つの時代を体験した当事者であつた。それゆえ、台湾は「實質的に中華民國の植民地であつた」という言葉は参考に値するであろう。<sup>\*16</sup>

### 三 台湾に來た中華民國と「遷占者国家」の概念

ところで、台湾戦後史を専門とする歴史学界はどうであろうか。若林正文は戒嚴令解除初期（一九八九年）にすでに「中華民國台湾化」の傾向を鋭く指摘した。当時、台湾における中華民國の蔣父子政權に対して、若林は蔣介石を「独裁者」、蔣経国を「ストロンダマン」と呼び、「權威主義体制」という見方をしていた。<sup>\*15</sup>その後、薛化元が「強人威權体制」という見方をし、蔣父子の意志による作用をとくに強調しているが、このような見方は台湾の学界では広く受け入れられている。<sup>\*17</sup>

しかし、權威主義体制論は、なぜ少数者の外省人集団が多数者を支配できるのか、という問題に答えてはいなかつた。一五年後、若林は別の方法——遷占者国家という概念——で、「戦後台湾国家」とその社会内部関係の性質について、次のように定義している。

(イ) ある社会における移住者集団の土着集団に対する優越性が保持されていること。

(ロ) その社会の上に建つ国家が出身母国から少なくとも事実上独立している。この二つの条件が同

時に満たされる場合は「遷占者国家」である。例えば、北アイルランドやジンバブエ（ローデシア）がそれにあたる。<sup>15</sup>

このような見方は近年、歴史学界で相当採用されており、以前の権威主義体制という説明に比べて、外来の統治集団が優位な地位に立ち、新しい土地を占領し国家を治める、という二点は事実符合し、より説得力がある。しかし、この二点から、なぜ、外来集団が移入してきたのか、そしてなぜ優位に立ったのか、また、占領地にて国家を治める正当性はどこにあるのか、などの問題が生じてくる。それを念頭において、あらためて上記の定義を考察すると、次のような問題が出てくる。

第一に、移住者集団の性質について。外省人集団は移住者（settler group）や開拓者という身分で台湾に来たのではない。また、ワイツァーは遷占者国家の特徴を「遷占者たちは、得た土地を永久の住処（Permanent home）ととらえ、この最大なる利益を維持するために、現地の原住民集団との社会的、経済的、政治的関係を形作っていた」と強調している。しかし、外省人集団については、かならずしも台湾を「永久の住処」とする意図は来台当初にはなく、戦争による避難であり、いわば亡命である。一時的な居住の目的が達成できればやはり元の居住地に帰ることを望んでいた。これは自ら望んで来る移民とは、心構えや振舞いなどの性質が違っている。

第二に、戦後、台湾に來た中華民国は、母国から独立しているといえるかどうか。ここに母国という定義に関する問題が生じてくる。

①中国共産党が建国した中華人民共和国（PRC、以下同様）が母国であるとすれば、一九四七年から一九九一年までの中華民国の「動員戡乱」期は母国と交戦状態にあった時期であり、中華民国は敗れ去った後、亡命政府となったわけで、よくいえば分割統治していたといえるが、独立したわけではない。また、中華民

国は長いこと中華人民共和国との統一政策を進めており、独立の傾向は見られない。

②中華民国は「法統」をもって、台湾内部の統治を進めてきたことである。「法統」そのものは母国の性質を証明するものであり、このことから事実上母国から独立してはいないといえる。それどころか、中華民国は台湾独立運動を始終弾圧しており、台湾独立運動者の一部は、運動の目的は中華民国体制から独立することであると考えていることから、中華民国がなかなか手放さない母国の地位がうかがえる。最近の国民党に関する研究では、台湾での国民党の政治操作におけるいわゆる「中央化」現象や、文化統合上の「祖國化」政策などは、いわゆる「母国」的性質を裏づけているといえる。

そもそもなぜ優勢な集団が移入してきたのかという原因の確認が必要であろう。そうすることによって、中華民国のもう一つの性質、つまり亡命政権という性質が浮き彫りにされるだろう。

蒋介石に対する九〇年代半ばの歴史研究では、中華民国の亡命政権の性質が明らかにされた。その研究成果とは、蒋介石が一九五〇年三月一三日に国民党員に対して行った演説に関する史料によるものである。

われわれ中華民国は去年の年末、大陸が陥落し、とうとう滅亡してしまった。今日、われわれは亡国の民となつてしまったのだ。諸君がこのことをまだ自覚していないことについては、まことに心が痛む。われわれ一般の同志に気概と血気がまだ残っているのなら、「中華民国回復」をわれわれの今後の奮闘目標にするべきではなからうか。<sup>16</sup>

このほかにも蔣氏亡命政権の態度を説明し得る現象としては、たとえば各地に立てられた石碑の「毋忘在莒」のスローガンなど、中華民国を「回復」しようとする営為が多数見られる。また、もし一九七二年の国連脱退時に、蒋介石がPRCと同時に国連に加入するという選択をしていれば、PRCを母国としながら、

中華民国が台湾において事実上独立しているという上記の遷占者国家の条件にあてはまる。しかし、歴史上、それは起こらなかった。

また、通常は亡命政府が他の国家に行き、受け入れ先の土地を自分の土地だと宣言して合法的に占領することはない。近代の国際法においてそのようなことは起こり得ないからである。しかし、台湾ではそれが起こったのだ。

その原因は、亡命と占領の時間的な順番が逆であったからである。一九四五年にまず占領が行われ、その後一九四七年から四九年に亡命政権が移ってきた。それゆえ亡命政権が新しく占領した土地で母国の「法統」体制を再建することができたのであった。

第二次世界大戦後、敗戦国は軍事的に占領され、日本とその植民地や領地も例に漏れなかった。一九五二年にサンフランシスコ条約が締結された後、日本は正式に連合軍占領体制から主権を再獲得し、台湾主権の放棄を宣言した。しかし、主権を中華民国に譲渡するという国際法的な主権確認がなされないなか、「蔣介石元帥」を代表とする連合軍による台湾の軍事的占領が行われ、台湾主権未定論を起すきっかけとなった。＊2010年時点

主権の問題はさておき、本章で問題にしているのは亡命政権体制と占領地の人々との関係がどうであったかということである。世界史上でチベットやポーランド王室など亡命政権の例は少なくないが、その治権は政権と一緒に亡命してきた本国の人々にしか及ばない。しかし、占領地で現地人集団にも治権が及んだ例は、中華民国以外には見当たらない。

世界的に、国境を越えた別の地理空間で、現地の人々に治権を適用する例は、通常、帝国主義時代から派生した植民地主義にあたる。帝国主義時代は列強の競争のため、植民地の資源の投入が必要であり、統治においても母国の利益が最優先されたため、エスニック集団間の権力支配の極端な不平等、資源搾取の必要性、そして当然ながら母国の言語や文化が優先されたのである。

これに鑑みて実際の状況を見てみると、中華民国が台湾に来て母国人による直接統治を行い、母国の利益を最優先させたことは、植民地主義に合致する。ただし、母国を元の土地から占領した土地に移し、もつとも直接的な統治を行ったのである。「母国の無い植民地王朝」と黄昭堂は述べているが、このいい方に、亡命と占領という事実上の基礎を加えたい方、つまり「新しい占領地に亡命して母国を再建した植民地王朝」といういい方が、当時の国民党を表現するのに適切ではなからうか。つまり、亡命政府は大部分の領土を失ったが、新しく占領した土地に母国の体制が存在しているため、母国は失われておらず、前からの国民に新たに現地の人々を加えて統治し、ごく一部の国際社会からも承認されていた。亡命中の母国が元の土地に「反攻」して治権を争うために、母国の利益を最優先させなければならぬのであった。これが、帝国主義が崩壊した二〇世紀の後半にもかかわらず、向山寛夫というところの「実質的に中華民国の植民地であった」台湾で起こった植民地主義の原因である。

それゆえに、被植民者が中華民国の蔣氏政権下で植民地統治の圧迫を上述したように肌身に感じていたことは、歴史的事実から理解できることでもあるといえる。それどころか、被植民者は日本と中華民国の二つの植民地政権を経験し比較したうえで、往々にして後者の植民地統治のほうが劣悪である、と思っていることは、上述した王育徳の「事態は重大といわねばならない」という言葉通りである。

これについてはやはり亡命という性質がもたらした「事態」を理解しなければならぬ。この事態は被植民者による植民地統治の技術の良し悪しについての評価やアイデンティティーの選択を指すのではなく、中華民国が行った長期の軍事動員や膨大な軍事費の支出は、普通の植民地に比べてさらに負担がかかるものであった。また亡命政権という性質が、台湾の主権はどこに帰属するかという問題へのP.R.C介入という結果を招いた。つまり、中華民国がP.R.Cとの争いに失敗すれば、被占領地の人々までもが後者に呑み込まれてしまう可能性があるということである。P.R.Cは台湾で治権を持つこともなく、占領したことすらないの



に、国際社会に台湾主権の領有を宣言しているのである。そのため、台湾の状況は母国により保護されている普通の植民地よりも惨めであるといわざるを得ない。これは、先に述べた李琢玉の「シナ人に歪められてた台湾史」という表現で示された状況であり、被植民者に対する中国の強力な主導に対するやるせなさを掛け言葉で述べているのである。李氏はわざと「シナ」というカタカナを使っている。実際に、大清帝国から始まり、その後の中華民国、また中華民国と一方では通商関係、一方では軍事対峙関係にある中華人民共和国、この三者の政治体制の差異は大きく、ともに日本と戦ったことがあり、またこの三者は継承、交戦を行った関係にもあるが、後述のように、このことは台湾被植民者のポストコロニアル期の歴史観と対日観にとともに深い影響を及ぼしているのである。

戦争が植民地にもたらす危険を、中華民国期だけではなく、日本植民地期においても台湾の人々がすでに経験してきた。政治史の視点からは、統治形態の違いにより日本植民地期は少なくとも、第一期（一八九五―一九一五年）「特別統治主義」政策の形成と展開期、第二期（一九一五―三七年）「内地延長主義」政策期、第三期（一九三七―四五年）「皇民化政策」期の三つの期間に分けられる。

統治政策の変遷に応じて被植民者の反応も違ってくるため、抗日闘争形態もそれに応じて三期に分けられる。第一期は武装を主とする抗日、第二期は近代政治、社会、文化運動を主とする抵抗、第三期は抵抗という点においては組織的闘争の空白期とされる。この空白は、若林のいう「加重された弾圧の下で」という理由であるにしろ、第二期の内地延長主義による統治の結果、台湾人が望んで植民者と同じ側に立ったにしろ、あるいはそのほかの考えがあったにしろ、この三期の人々の反応は明らかに違うものであった。

同じように、植民地統治の終了後、日本の過去の統治に対して、人々は植民地期の違う段階による経験から、違った反応をするはずである。たとえば、第一期の時代について、大江志乃夫は別の視点からすれば征服戦争のような侵入統治形態であり、征服戦争による多くの傷跡を残し、ポストコロニアル期に和解や処理

がなされるべきにもかかわらず、いまだにそれが行われていない、と指摘している<sup>27</sup>。また、第三期には二〇万人の台湾人が戦争に動員され、そのうちの三万人あまりの戦没者や死傷者に対する慰霊や補償問題、奉給保険費給付、さらには慰安婦などの戦争犯罪問題、および一般市民が戦争で受けた被害などは戦後処理の問題であり、植民地支配終了後に迅速に処理すべき問題であったにもかかわらず、まったく軽視されていた<sup>28</sup>。

前述の植民地期の歴史的な傷跡や人々の権利や利益に対する保障（日本から来た台湾の内地人の膨大な財産が接収されたことも含めて）などの問題を「植民後処理」と呼ぶ<sup>29</sup>。「戦後処理」と同様に、「植民後処理」に対しても元植民主と被植民者がかなりの精力を割くべき重要なポストコロニアル社会の課題である。しかし、いったい誰が処理するべきなのだろうか。

まず、台湾の被植民者は中華民国により統治されており、日本に対して植民後の処理を主導する能力はない。また、中華民国は台北和約によつてすでに「戦後処理」を行い、蒋介石は賠償を放棄している。そして、中華民国が日本と植民後処理を行う資格があるかということも問題になる。日本は本来それなりの責任を負うべきだが、それを看過したまま、中華民国と国交を結び、その後断絶したことが、さらに植民後処理の障害となっている。これらの植民後の事務的処理が行われていないことも、当然台湾の対日観に影を落としている。

このほか、日本植民地時代の第一期（征服戦争）と第三期（対外戦争）の戦争は、まったく性質の違う戦争であり、被植民者のはたす役割も大きく違う。しかし台湾のポストコロニアル期において、歴史研究の欠如や中華民国の主導による歴史教育のため、人々がこの二者を区別することを困難にしている。この二つの時代を直接経験した被植民者の当事者ならこれらを混同する可能性は低いであろうが、後の世代の人々はそのことを理解しておらず、理解しようとせず、さらに中華民国の亡命という事実由来する歴史観の特定方向への主導により、さまざまな要素が複雑にからみ合い、誤解や混同が生じやすくなっている。これが台湾

のポストコロニアル時代の歴史認識の実情である。

#### 四 エスニック集団間の関係の変化

この一〇〇年あまりにおいて、台湾では二度の大規模な民族移動があった。二層の植民地主義に覆われるなかで起きた民族移動が、複数のエスニック集団間の関係にいかなる影響を及ぼしたのだろうか。一度目の移動は、一九世紀末より日本領となった台湾社会で始まっていた。移殖者にあたる人々は、本来大日本帝国民という民族意識しかなかったが、台湾に移入してから徐々に新しいエスニック集団を形成した。このエスニック集団の文化的出自は、北海道から沖縄まで、生活風習や言葉また社会階層もかなり異なっていたが、内地人という呼称に集約されていた。台湾は満州や朝鮮とは違い、政府による計画的な移民はわずかであった。そのため派遣されてきた官吏、技術者や大企業の職員以外は、ほとんどが親戚を頼ってやってきた小商人で、政治的には優勢であったが、経済的には本島人のほうが優勢であった。内地人の人口に占める割合は初期は台湾人の人口のわずか三%強であり、植民地末期でも六%にしかいたらなかった。人口的に弱小集団といえるが、二世、三世も生まれ、同化政策の下で、台湾の日本化が進むにつれ、本島人との通婚も珍しくなかった。

日本植民地期において、植民者对被植民者の二項対立的な構図は、エスニック集団に对照させて、内地人対本島人としてとらえられるが、より正確にいうと、植民される側は福建系（今の和佬人）と広東系（今の客家人）と高砂族（今の原住民族）に分かれている。この三系統のエスニック集団（さらに細かく分けることができる）は、すでに長い間台湾におり、それぞれ住み分けしていた。人口の七五%を占め、一番多数者の和佬人は海辺から大平野と都会に住み、農業、漁業と商売に従事していた。一三%の少数者である客家人は丘陵地に住み、「耕読伝家」（代々農業と学問の道に従事する）という家訓の通り、農業に従事する一方、官吏

になれるよう子弟の教育に熱心であった。そして人口の三%しか占めていなかった高砂族はさらに一〇以上の系統に分かれ、山地や東部の海岸に住み、狩猟採集の生活を営んでいた。それぞれのエスニック集団は、生業の方法も違い、もちろん言語、生活習慣などの深い溝もあり、歴史的に見てかれらが共同の政治組織を作ったという記録はない。それどころか、互いに縄張りを設け、しばしば武装衝突しかねない緊張状態におかれていた。

日本植民地期において初めて植民主に対し、本島人の「台湾人意識」が形成されたといわれるが、基本的に「台湾人」「台（湾）語」を自称用語として誇りを持って使ったのは和佬人であって、客家人と高砂族は使っていないかった。また、植民統治初期の武装抗日期において、客家人が和佬人よりも多かったこと、そして部族数の多い高砂族のなかでも日本に抵抗しなかった民族もいたことなどから、日本植民地時代のエスニック集団間において、植民者と被植民者の対立以外に相互がどのような関係にあったかについては、いまだかならずしも研究が深められていない。

さて、日本植民地支配の終了後、二度目の大規模なエスニック集団の移動が生じた。今度はわずか三年（一九四六～四九年）の間に、六〇万もの人間が出て行き、一〇〇万以上の人口移入があったのだ。このような大規模な人口移動は、しかも海を越えた島規模で起きた移動としては、世界史的に見てもまれであるといえよう。あたかも台湾の社会で、地殻変動が起こったように、地上のエスニック集団の構造と相互の関係にも変化が起こったのである。

①内地人が一挙に台湾から引き揚げ、またかれらの全財産は「接収」されてしまうという運命に遭った。ごく少数の本島人との婚姻者以外、このエスニック集団は台湾の土地でゼロになった。かれらの歩んだポストコロニアルの歴史的過程は台湾の土地ではなく、内地日本に帰ってから始まったのであった。ただし、内地人の残した全財産、つまり社会的資本、屋敷空間および権力的空間は、外省人の形成に一役買い、台湾の

ポスト(日本)コロニアル風景の一つの重要な場面となった。

②外省人という新しいエスニック集団が大陸で起きた国共内戦を逃れ、台湾に移動し、その後半世紀以上たった今日まで定住している。この新しいエスニック集団の参入によって、台湾のほかのエスニック集団が大きな影響を受け、それぞれ急速にこの新集団と新たな関係を持つことになった。

③外省人エスニック集団の介在によって、他のエスニック集団が元植民者である日本・内地人との関係について、大きな影響を受けた。これは一般的にいう「脱植民地」のプロセスとは大きく異なる。

以上のような現象から見れば、日本植民地終了後のエスニック的な主役は今日の名称でいうと、原住民族グループ、和佬人、客家人、(日本)内地人、外省人と、ざっと五つのグループに分けることができる。それぞれの関係が組み合わさる状態となり、台湾のポストコロニアル風景を織り成してきたのである。

それについて紙幅の制限のため、①を省き、以下台湾で起きた②以下の現象を敷衍していきたいと思う。まずは、外省人というエスニック集団の出現についてである。文化的には中国大陸各地に由来し、ウイグル族、満族、モンゴル族をはじめ、人数的に多いとされる中国大陸の沿海地域等から渡来した。とくに福建省、浙江省、山東省などの出身者が多い。伝統的なエスニック集団の分類基準から見れば、この集団は一つの民族集団としてあまりにも違いが大きすぎる。しかし、一つのエスニック集団としてこれだけ急速に集団性が形成されたのは、国共内戦後の亡命という共通の深刻な体験、そして戦後の政権がこれらに特殊な優越的な地位を与えたからである。

また、戦乱を逃れてきたかれらが住む場所はもちろんなかった。かれらの収容場所としては内地人から接収された宿舍や私財である屋敷がそのまま当てられ、難民キャンプのような臨時施設を準備しなくても済んだのである。しかも新政府は、台湾の都市部の道の名前や地名を中国各地の地名に変えた。それはあたかも日本植民地初期に日本が台湾でやったことと同じであった。

つまり、政治権力の絶対的優勢をはじめ、言葉の強要、文化の押しつけ、社会的空間の占有など、外省人のイメージがあまりにも元植民主日本と重なり、前述の通り、よく元の被植民者たちから比較される対象となったのであった。しかし、人口的に見れば、たった四年間に人口五五〇万の台湾に、一一〇万が流れ込んだその衝撃は、日本内地人の、五〇年近くにかけて三%から六%まで人口が成長したその影響とは、比べものにならない。

さらに外省人が新たな支配者として台湾に入ってきてから、台湾のほかのエスニック集団との距離関係をどう構築したか。それについては、ほかならぬ二・二八事件が発生したことが、エスニック集団の距離関係を調整する原点となった。

二・二八事件に対しては、すでに政治的派閥闘争、経済、治安などいろんな側面から検討されてきた。エスニック関係については、歴史学界では事件当時から長い間、「省籍矛盾」という言葉でこれを解釈し、エスニック集団という概念は用いられなかった。「省籍」の概念からすれば、台湾に来た外省人も本省人も同じエスニック集団(すなわちいわゆる「中国人」となる。たんに内部同士で不愉快な出来事が起こって暴力事件にまで事態が深刻化したから軍を導入して鎮圧した、というのが国民党政権による解釈、そして処置だった。

戒厳令時代の台湾では、エスニック集団間の問題はタブーとされ、同じ中国人の間での省籍問題にすり替えられていた。近年、歴史学では、両者間の文化的差異を明らかにし、事件は「外省人对本省人」という二つのエスニック集団の対立によるものだと修正し、いわゆる「エスニック紛争」ととらえてきた。

だが、筆者は戦後の新たな植民主対被植民者の関係については、これを「エスニック紛争」という概念でとらえるにはとらえきれない部分があると考ええる。まず、エスニック集団ごとに外省人との関係を整理すると、①和佬人と外省人、②客家人と外省人、③原住民族と外省人、というように、それぞれの関係を分ける

ことができる。

### ①和佬人と外省人

和佬人は台湾では最多数を占めるエスニック集団であるが、一九世紀末に日本が軍事力を行使して台湾に入ってきたときに、客家人より抵抗は少なく、むしろ和議を講じようとした。その原因は、かれらのなかに地主や都市の商業などに従事する者が多かったことや、すでに大陸文明を見捨てて台湾に来たので「中原の意識」が薄かったことなどが挙げられている<sup>33</sup>。

いずれにせよ、二・二八事件の起きた前後、二節の楊基振の回顧録にもあるように、和佬人たちは裏切られたという気持ちを強く持った。とくにエリート層が虐殺の目に遭ったことから、その後の和佬人と外省人の間の深い溝ができた。だが、近年の研究において、いわゆる本省人のなかに、「半山」と呼ばれる、すでに日本植民地期に大陸に渡って国民党と関係を結んでいた人たちがいたこと、かれらが事件の前後に一定の政治的役割をはたしたことがより明らかにされてきた。「半山」たちは外省人集団の政権にとり入り、かなり協力的な役割をはたして、その後も政治的な地位を多数獲得していった。「半山」のエスニック出自は、まだはっきり研究されていないが、客家人がかなりの数を占めており、和佬人もいたとされる<sup>35</sup>。

「半山」の存在はいわゆる本省人と外省人のエスニック衝突というとらえ方では扱いにくい問題を提起した。そして何よりも、二・二八事件をめぐって、本省人という単一の呼称ではとらえきれない問題が存在することが明らかになった。つまり、客家人と和佬人それぞれの外省人との距離感覚は微妙に異なるのである。

### ②客家人と外省人

近年、客家人の政治動向の研究のなかで、蕭新煌と黃世明は相当な資料を分析した結果、二・二八事件の際に、客家地域の被害はあったにしても、外省人との関係は比較的友好的であったと、次のように述べている。

二・二八事件における客家人は、国家機関への抗争から導かれた省籍衝突に関して、福佬人に比べ、行動の主導者となることは少なかった。逆に一部の客家の村落は外省人の避難所となり、さらには福佬語を話せない客家人は敵味方の分類のなかで、外省人だと誤認され、不幸にもそのとばっちり遭う者もいた。柯遠芬は、新竹市では(三月)一日に暴徒が車で外省人を殴っていじめていたが、それほど激しいものではなかったと述べている。新竹地区は客家人が集中して居住する場所であり、客家人は外省人に対して比較的友好的であった。このため外省人の多くは客家の村へ避難した。……また二・二八事件の動乱の多くが都会で発生し、田舎へは波及しなかった。

このように、事件が発生した時期に客家人は外省人と比較的友好な関係を維持していたことを指摘している。また客家出身の学者である戴國輝氏も、二・二八事件の現場に行くわし、外省人の被害に対し深く同情をよせた<sup>37</sup>。そして台湾独立運動者たちが国民党政権に対して帰順した事件を引いて、戴は「台湾独立運動の元老たちが主張した、台湾人はすでに中国人とは異なる民族を形成したとする台湾民族論が虚構であり、自己崩壊してしまった……」と述べている。また彼は著書の結論において、ある人の言葉を借りて「台湾海峡の『擬似国境』が一日も早く開放されて、ニクソンの期待する形の『中国人』の一員としてともにありたいすべての中国人は『左も右も』『大陸部も島嶼部も』同胞だ」と述べている。つまり、戴は「中国人」としてのアイデンティティを持つことを訴えたのであった<sup>38</sup>。

実際に、九〇年代中期にいたっても客家人居住地でフィールドワークを行った研究者が、客家人の和佬人に対する警戒心についての話をよく耳にした、と記している<sup>39</sup>。民進党が政権を勝ち取って独立宣言をし、公用語である中国語を和佬語にし、そのため客家語が消えてしまうのではないかと心配していた人々は皆日

本語世代の人々であり、日本植民地時代の「本島人」である。少数派の生存戦略という角度から見ると、同じ本省人でも、国民党が来てからの客家人は外省人に対して、和佬人と同じ戦略をとっていたとはかぎらない。

このような視点から見れば、同じ本省人でありながらも、客家人は文化的な態度において、むしろ「中原意識」が強く、中華民族の一員としての誇りを強調する傾向がある。そのため、日本植民地期の第一期の武装抗日には農村部に住んでいた多数の客家人が参加した。そして二・二八事件よりも、むしろその後の白色テロ時期に共産党・左翼と連座した客家人の被害が大きかったとされている。そして近年の台湾政治の局面では和佬人よりも国民党を支持する傾向にあると指摘されている。だが、このような状況はすべての客家人にあてはまるものではない。とくに文学的に優れた作家や知識人は、いわゆる「中原意識」と政治的体制の選択とを直結させるのではなく、和佬人と同じく民主化運動に走った人も少なくない。

### ③ 原住民族と外省人

二・二八事件後の白色テロ時代に、共産党のスパイと疑われ被害に遭った原住民エリートで、タイヤル族の日野三郎とツォウ族の高一生の冤罪（平反）が最近ようやく陽の目を見るようになった。実際に、原住民エリートがかれらを圧迫する中華植民地主義に反抗できるようになるには、結局八〇年代まで待たざるを得なかった。この時期に、一連の原住民権利回復運動が始まることとなった。

外省人と原住民族の関係を語るうえでもう一つ述べておかななくてはならないことは、外省人と原住民との通婚の状況である。戦後台湾に来た外省人のうち、二七万人以上の在籍軍人がいた。大陸反攻の夢がかなわないとわかった時点で、その多くが退役後、政府から開墾用の山林地や都会の眷村の住居を与えられ、金銭により社会の貧困層である原住民の少女を娶るといふ現象がしばしば見られた。今のところ具体的な統計はないが、文学作品や原住民歌謡にこのような状況が描かれており、台湾のエスニック集団関係の研究におい

てもこの事実はよく指摘されている。

とくに、大清帝国から日本植民地期まで、原住民族は和佬人、客家人とは対峙状態にあり、通婚することはほとんどなく、異なった原住民族間の通婚も日本植民地時代は禁じられていた。しかし、中華民国後、軍隊から除役した外省人が原住民族域で開墾の特別許可がなされ、現地の女性と結婚したり、あるいは原住民女性が外省人の住む眷村に嫁入りする現象があらわれ、その比率は和佬人や客家人に比べるとかなり高い。これは戦後台湾のエスニック関係の複雑な一面を呈している。

台湾のポストコロニアル期において、内地人が去った時期、また外省人が来た時期は、ほぼ重なっている。その後外省人はそのまま台湾に残り、植民者的な態度をもって台湾の思想と言論の市場を主導してきた。そのため、外省人の影響を抜きにして本来の被植民者たる本省人と日本との関係を語ることはできない。

しかし、外省人自身のほとんどは東北の満州国から来た者を除いて、日本の植民統治を受けたことがなく、かれらが語るのには、大陸にいたころの日本との戦争体験であり、そのような敵同士の経験を教育の場でも台湾の被植民者の後裔たちに押しつけていた。マスコミや書籍出版の市場でも、八〇年代末まで外省人による日本との敵同士の経験に基づく言説が台湾の書籍市場を独占していた。いわゆる「侵略される側の日本観」が本来の被植民者から日本について語られるべき「植民される側の日本観」を代行していた現象がよく見られる。また、「植民される側の日本観」の資料が、社会の表面に現れる可能性はなく、往々にして詩歌や文学、自伝などの素材に姿を隠して現れるのみである。こうして「ポスト日本・中華植民地主義」時期に入った台湾で生じた対日観は、いわゆる「脱植民地」のプロセスと大いに異なってくるのである。

### 結論——ポストコロニアル現象の複雑性

一般的な「脱植民地」現象は、単層の植民地主義の影響しか対象としていない、いかに植民者の圧迫から

「離脱」・「抵抗」して「自」の文化とアイデンティティーを「回復」するかという問題が中心となってくる。単層のポストコロニアル現象ならば、いわゆる「親日」「媚日」「反日」「抗日」などの語彙で内容や状況を示唆できる。しかし、台湾のような二重の支配を受けたポストコロニアル地域で見られるのは、前の植民者に対する「離脱」や「抵抗」ではなく、それどころか、前の植民者もたらした文化——日本を通じた近代（欧米）化文明にしろ、日本文化自体にしろ——に対する肯定的態度へとつながる現象である。そして時には、「離脱」や「抵抗」を図るのか堅持するのか、この二者は区別しにくい曖昧なものもある。これは人々が二つの時代、二つの文化、二層の植民地統治を経て得た経験である。この場合、被植民者の「抵抗」の対象は日本ではなく、さらに身近な「中華植民主義」なのである。すでに多くの口述記録が裏づけるように、この二〇〇年、被植民者が「大和魂」を肯定し、この精神力によりもつとも耐えがたい国民党の高圧統治の日々を乗り越えることができた、とかれらは語ってきた。また、日本の植民地主義が終わった後、逆に一生懸命日本語を話し、日本語の詩歌を書くようになった。さらに、日本人がある特殊な要因により民間信仰の神にまで祀り上げられたことはどのように説明できるのだろうか。被植民者が口にする大和魂や日本語の詩歌の語りから読み取れるのは、「日本」はかれらにとって他者ではなく、自己史の切り離せない一部として明確に存在しているということである。<sup>48</sup>

さらに一歩踏み込んで細別すれば、①原住民族と日本、②和佬人と日本、③客家人と日本、それぞれの関係はエスニック集団の接触の経験により違い、変化している。今後、学界でのさらなる研究に期待したい。

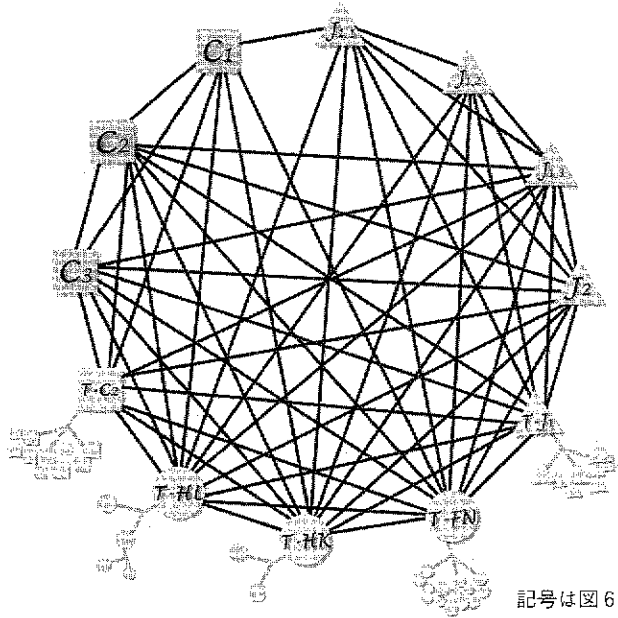
この一〇〇年、新たに日本から来た内地人と中国から来た外省人に接することで、台湾人（原住民族、和佬、客家を含む）は、この二者の文明やエスニック集団、政体と始終離れられない関係にあった。二〇世紀前半に、矢内原忠雄が洞察した「台湾は日本と支那との二つの火の間に立つ」関係にしろ、若林正丈のいう二つの「忘れ得ぬ他者」——すなわち日本と中華民国——から離れられない台湾ナショナリズムの誕生にし

る、このような関係は単純な二項対立からはけっして解釈できないものである。<sup>49</sup>そしてこのような奇妙な三角関係の相互作用は、台湾のポストコロニアル期において途切れることなく、いくつかの現象を生み出している。一例としては、外省人には二・二八事件前後の台湾人の言語や振る舞いが日本人によく似ていると思われた。しかし、台湾人（高砂族を含む）から見ると、外省人の圧迫的な振る舞いなどが、元の植民者日本と比較されているということも、外省人自身は知らなかった。また、日本人にとって、中華民国から来た外省人は、本省人との民族の発祥は同じであり、漢民族文化という面でも似ているため（近代化の程度にはかなりの差があったが）、外省人と本省人は似ていると勘違いされやすかった。このような現象から見出せるのは、台湾のポストコロニアルと欧米の植民地で起こった人種差別やその差異の状態はかなり違うということである。オーストロネシア語族に属する種族は外見上の差はあるが、みな黄色人種である。上記の三者間でそれぞれ似ているところがあるため、外部から見た場合ステレオタイプのような判断がまかり通り、誤解が生じるのである。

このほかにも、この三者とも二〇世紀後半に重度の故郷喪失症にかかっているという奇妙な現象が起きている。まず、台湾の被植民者にとっては、自分自身はその土地を離れていなくても（政治迫害を受けた在外のブラックリストの者は別として）国籍や言語文化環境の転換により、よく知っている日本文化とのつながりがとつぜん絶たれたため、日本文化への懐かしさが生じたのである。九〇年代になって自由な発言ができるようになり、アイデンティティーを選択できるようになると、かれらは自分を「台湾系日本人」といい、「母国は日本、祖国は台湾」と考えているのである。<sup>50</sup>

また、台湾にすべての財産を残して日本に引き揚げなければならなかった内地人の二世、三世にとっては、台湾が生まれ育った故郷である。かれらの回顧録や自伝などには台湾への望郷の思いが語られている。かれらは自分をいわゆる「日本系台湾人」と呼び、「母国は台湾、祖国は日本」と考えているのである。

図6-2 台湾ポストコロニアル期のエスニック集団の複雑性



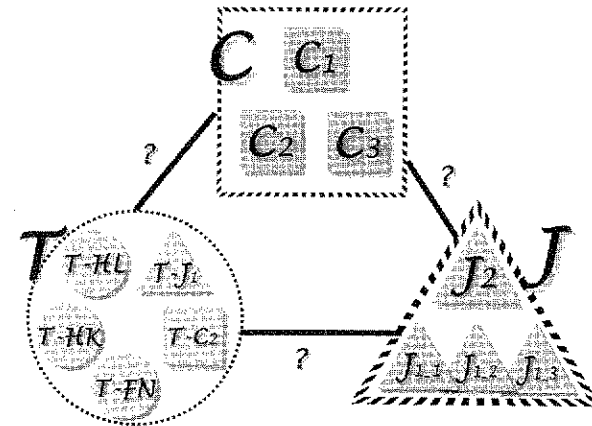
記号は図6-1と同じ

出所：筆者作成。

歴史的には、原住民族と大清帝国の関係と、和佬人や客家人と大清帝国の関係はかなり違っている。同じように、日本の植民地期において、各エスニック集団と日本統治者の関係も違っている。そして、中華民国期においても、各エスニック集団と中華民国および中華人民共和国の関係も違っている。

また、歴史は層の重なりであり、後の時代になればなるほど人々が積んできた歴史的経験も厚くなる。とくに台湾では近代アジア地域の激しい変動の渦中であつてその影響を強く受けてきた。歴史的には三節に述べたように、中国といつても大清帝国、中華民国、中華人民共和国という三つの異なる政体に分けることができ、日本の植民地期も性格の異なる三期に分けることができる。さらに、植民地期後の日本という国はまた相当の変化が起きている。台湾の多民族社会にお

図6-1 台湾ポストコロニアル期のエスニック集団の三角関係



- T-FN = 台湾原住民族
- T-HK = 台湾客家人
- T-HL = 台湾和佬人
- T-J<sub>1</sub> = 日本植民地期に台湾にいた内地人
- T-C<sub>2</sub> = 台湾外省人

- C<sub>1</sub> = 大清帝国
- C<sub>2</sub> = 中華民国
- C<sub>3</sub> = 中華人民共和国
- J<sub>1\_1</sub> = 日本植民地期第I期 (1895~1915)
- J<sub>1\_2</sub> = 日本植民地期第II期 (1915~37)
- J<sub>1\_3</sub> = 日本植民地期第III期 (1937~45)
- J<sub>2</sub> = 戦後日本

出所：筆者作成。

三番目に、台湾に亡命した外省人はさらに深刻な故郷喪失症にかかっていた。かれらは、多くの文学作品のなかで大陸の故郷に対する思いを述べ、次世代の思想教育においても、つねに「大陸を光復」したがる人情を注ぎ込んだ、歌曲や歴史教育などの分野でも中国が祖国であるとすり込む教育を行ってきた。

以上、三者とも故郷を恋しがっているが、その内容はまったく違うものである。それゆえ、台湾のエスニック諸集団が北の日本と西の中国との間に自らをおくとき、台日中間に生じる三角関係は多種多様なものになるのである。今ポストコロニアル時期になって、台湾人が日本を眺めるという際に、エスニック集団ごとに、つまり原住民族、和佬人、客家人、日本の内地人、中華民国の外省人の五つの集団ごとにそれぞれ課題を分けることが妥当であろう(図6-1を参照)。

いては、上述の政体や積み重ねてきた歴史的経験を通して、植民と被植民の関係だけではなく、交戦関係や肩を並べてともに戦った関係、征服と被征服の関係、貿易通商の関係なども存在した。これらの経験は一九八七年戒厳令解除以降の「ポスト日本・中華植民主義」の時代に複層的に存在し続けているのである。これらとの関係を理念的なモデルで表すとすれば、図6-2のような複雑関係でこれを表すことができる。ここから一〇〇種以上の二項関係と三角関係へと発展させることもできるのである。台湾の対日観の問題に対しても、発問者のエスニック的背景や日本のどの時期を対象とするのか、また、発問者に対するいわゆる中国の影響の大きさなどによって、ポストコロニアル期の対日観のルートを探ることができると考えられる。

このような複雑な状況下で、外部者がエスニック集団と台湾史とを混同し、特定集団の思考や行動に台湾史を還元しがちな誤解を生み出すのは無理もない。だが、中国、台湾出身の歴史学者やポストコロニアル批判をする研究者たちは、自分自身もある程度はエスニック的背景や歴史的経験要因の影響を受けることを自覚しながら、この問題に接近することになる。日本の研究者も、このような問題に對峙するとき、戦前の歴史的経験の積み重ねがあり、客観的中立的な「外国人研究者」としての立場に立つことは難しい。これは本文のはじめに指摘した自文化研究と異文化研究の問題にも関わってくる。また、三つの地域出身の研究者が自覚しなければならぬ点であり、学者としての真価が試される部分でもある。

【注】

- \* 1 若林正文 (1989: 244)。
- \* 2 主に一九一〇年代の台湾総督府臨時旧慣調査会による調査書の翻訳、編集および言語復元を指す。
- \* 3 黄智慧 (2003: 2006a; 2006b) および Huang (2001; 2003) を参照。
- \* 4 Huang (2001)。

- \* 5 黄英哲・許時義編訳 (2007: 693)。
- \* 6 今川乱海編 (2006: 127-133)。
- \* 7 黄智慧 (2003: 133)。
- \* 8 Huang (2003)。
- \* 9 史明 (1994: 578-579)。
- \* 10 史明 (1994: 644-645)。
- \* 11 一九八〇年「漢文版」の日本語の序に於て。
- \* 12 若林正文 (1996: 279)。
- \* 13 王育徳 (1985: 212)。
- \* 14 王育徳 (1985: 103-104)。
- \* 15 向山寛夫 (1998: 370)。
- \* 16 若林正文 (1989: 37-39)。
- \* 17 藤化元 (2007: 34-45)。
- \* 18 若林正文 (2008: 80-81)。
- \* 19 Weitzer, Ronald (1990: 26) より引用。
- \* 20 松田康博 (2006)。
- \* 21 黄英哲 (1999)・何義麟 (2003)・丸川哲史 (2007)。
- \* 22 任榮祖・李敏 (1995: 792)・李俊峰 (2004: 106-107)。
- \* 23 若林正文 (2008: 59)。
- \* 24 雲程 (2005)。国際法の専門家である雲程は、台湾の主権は主要占領国のアメリカにあり、中華民国は占領と亡命の両面性を持つと主張している。

〔编者補注〕この点に関して、日本政府の立場は「台湾の帰属については発言しない」というものだが、二〇〇九年五月、日本政府の対台湾窓口機関である交流協会の齋藤正樹代表は「サンフランシスコ平和条約で日本が領有権を放棄した後、台湾の国際的地位は確定していない」と主権未定論を是認するところがかねがねない講演をした。この発言は、台湾の領有権



は中華民國政府が継承したという立場をとる馬政府の怒りを買い、齊藤代表は半年後の二〇〇九年二月辞任することになった。台湾主権論の解釈は、今日「中華民國」派と「台湾独立」派とを分かち歴史認識の要の一つとなっている。

- \* 25 黄昭堂 (1998: 4-5)。
- \* 26 若林正丈 (1996: 282-283)。
- \* 27 大江志乃夫 (2001)。
- \* 28 黄智豊 (2006a)。
- \* 29 黄智豊 (2006a: 68)。
- \* 30 堀江俊一 (2006)、『竹中信子 (2001: 226)』。
- \* 31 以上の人口比率は一九四二年の統計である。朝日新聞社 (1944)。
- \* 32 何義麟 (2003) 参照。
- \* 33 史明 (1994: 450-451)。
- \* 34 何義麟 (2003)、『松田康博 (2006: 189-200) 参照』。
- \* 35 蕭新煌・黄世明 (2001: 242-245) 参照。
- \* 36 蕭新煌・黄世明 (2001: 265) より引用。
- \* 37 戴國輝 (1988: 101-102)。
- \* 38 戴國輝 (1988: 174: 226) より引用。
- \* 39 堀江俊一 (2006: 116)。
- \* 40 陳運棟 (1992: 380-389)。
- \* 41 蕭新煌・黄世明 (2001: 122: 300)。
- \* 42 施正鋒 (2004: 16-27)。
- \* 43 若林正丈 (2008)。
- \* 44 胡台麗 (1990)。
- \* 45 黄智豊 (2006b)。
- \* 46 若林正丈 (2004: 113-115)。

- \* 47 向山寛夫 (1998)、『尾原仁美 (2007)』。
- \* 48 黄智豊 (2003)。
- \* 49 若林正丈 (2004: 109-113)。
- \* 50 柯徳三 (2005: 230-231)。
- \* 51 たゞえば筆者の出身であるエスニック集団も和佬人とされるが、系譜や地域的要素を調べると、客家人や平埔族の出自も混じっているようである。
- \* 52 今のところフランス人研究者による外省人研究の例があり、これはこのような要因を比較的免れることのできる例である。コルキユン (2008: 199) 参照。

#### 【参考文献】

- 朝日新聞社編 (一九四四)『南方の拠点・台湾』朝日新聞社。  
五十嵐真子・三尾裕子編 (二〇〇六)『戦後台湾における(日本)——植民地経験・変貌・利用』風響社。  
今川乱魚編 (二〇〇六)『李琢玉川柳句集 酔牛』新葉館。  
雲程 (二〇〇五)『佔領與流亡——台湾主権地位之両面性』台北・懷藝企業。  
王育徳 (一九八五)『台湾——苦悶する歴史』弘文堂。  
汪榮祖・李敖 (一九九五)『蔣介石評伝』台北・商周文化事業公司。  
大江志乃夫 (二〇〇一)『植民地領有と軍部とくに台湾植民地征服戦争の位置づけをめぐって』柳沢遊・岡部牧夫編『展望日 本歴史20——帝國主義と植民地』東京堂出版、六四―八五頁。  
尾原仁美 (二〇〇七)『台湾民間信仰裡對日本人神明的祭祀及其意義』台北、政治大學國立政治大學民族學系碩士論文。  
何義麟 (二〇〇三)『二・二八事件——「台湾人」のエスノポリティクス』東京大学出版会。  
柯徳三 (二〇〇五)『母国は日本、祖国は台湾』桜の花出版。  
許世楷 (一九八四)『日本統治下の台湾』東京大学出版会。  
黄英哲 (一九九九)『台湾文化再構築 1945〜1947の光と影——魯迅思想受容の行方』創土社。

- 黄英哲・許時嘉編訳(二〇〇七)『楊基振日記・附書簡・詩文(上)(下)』台北、國史館。
- 黄昭堂(一九九八)『台湾那想那利斯文』台北、前衛出版社。
- 黄智慧(一九八九)「天理教の台湾における伝道と受容」『民族学研究』五四(三)、一九二―二〇九頁。
- (二〇〇三)「ポストコロニアル都市の悲情——台北の日本語文芸活動について」橋爪紳也編『アジア都市文化学の可能性』清文堂、一一五―一四六頁。
- (二〇〇六a)『戦後』台湾における慰霊と追悼の課題——日本との関連について』国際宗教研究所編『現代宗教2006 特集 慰霊と追悼』東京堂出版、五一―七五頁。
- (二〇〇六b)『台湾における「日本文化論」に見られる対日観』『アジア・アフリカ言語文化研究』七一、一四七―一六八頁。
- 胡台麗(一九九〇)「芋仔與蕃薯——台湾「榮民」的族群關係與認同」『中央研究院民族学研究所集刊』第六九期、一〇七―一三三頁。
- コルキユフ、ステファン(上水流久彦・西村一之訳)(二〇〇八)『台湾外省人の現在——変容する国家とそのアイデンティティー』風響社。
- 施正鋒(二〇〇四)『台湾客家族群政治與政策』台北、新新台湾文化教育基金会。
- 史明(一九八〇)『台湾人四百年史(漢文版)』Sun Jose、蓬島文化公司。
- (一九九四)『台湾人四百年史』新泉社。
- 蕭新煌・黄世明(二〇〇二)『台湾客家族群史 政治編』台北、台湾省文献委員会。
- 薛化元(二〇〇七)『台湾全志卷四 政治志民 憲政篇』南投、国史館台湾文獻館。
- 戴國輝(一九八八)『台湾——人間・歴史・心性』岩波書店。
- 竹中信子(二〇〇二)『植民地台湾の日本女性生活史』田畑書店。
- 陳運棟(一九九二)『客家人』台北、東門出版社。
- 堀江俊一(二〇〇六)『二つの「日本」——客家人系を中心とする台湾人の「日本」意識』五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における「日本」——植民地経験・変貌・利用』風響社、九三―一二〇頁。
- 松田康博(二〇〇六)『台湾における一党独裁体制の成立』慶應義塾大学出版会。

- 丸川哲史(二〇〇七)『台湾における脱植民地化と祖国化——二二八事件前後の文学運動から』明石書店。
- 向山寛夫(一九九八)『日本の台湾むかし話』中央経済研究所。
- 李筱峰(二〇〇四)『台湾人應該認識的蔣介石』台北、玉山社。
- 若林正文(一九八九)『転形期の台湾——脱内戦化』の政治』田畑書店。
- (一九九六)『台湾植民地支配』山根幸夫・藤井昇三他編『近代日中関係史研究入門』研文出版社、二七七―三二二頁。
- (二〇〇四)『台湾ナショナリズムと「忘れ得ぬ他者」』思想』九五七(一)、一〇八―一二五頁。
- (二〇〇八)『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会。
- Huang, Chih Hwei (2001) "The Yamotomashi of the Takasago Volunteers of Taiwan: A Reading of the Postcolonial Situation," In *Globalizing Japan: Ethnography of the Japanese Presence in Asia, Europe, and America*, edited by H. Befu and S. Guichard-Anguis, London and New York: Routledge: 222-250.
- (2003) "The Transformation of Taiwanese Attitudes toward Japan in the Postcolonial Period," In *Imperial Japan and National Identities in Asia, 1895-1945*, edited by N. Li and R. Cribb, London: Routledge-Curzon: 296-314.
- Wetzer, Ronald (1990) *Transforming Settler States: Communal Conflict and Internal Security in Northern Ireland and Zimbabwe*, Berkeley: University of California Press.